

向けに倒れた後、両下肢不全マヒとなり当科入院。腰椎単純レ線にて L4/5 椎間板腔狭少化、L4 下縁 L5 上縁が破壊され、CT 所見と合わせて、化膿性脊椎炎と考えた。核医学的検査で ^{111}In トロポロン WBC scan にて左鎖骨、および第 4, 5 腰椎に異常集積がみられず、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ MDP scan および ^{67}Ga scan にて両部に異常集積がみられた。生検および手術時採取した組織の培養で両部から *Staphylococcus aureus* が同定された。従来の報告と異なり、その詳細な機序は不明ながら、 ^{111}In WBC scan よりも ^{67}Ga scan が有用であった 1 例を報告した。

19. 手の末節骨に転移した 3 症例の RI 診断

小須田 茂 後閑 武彦 田村 宏平
(国立大蔵病院・放)

土器屋卓志 佐藤 仁政
(国立東二病院・放)

伊東 久夫 久保 敦司
(慶大・放)

きわめてまれな手の末節骨転移 3 例を経験した。肺癌、食道癌、子宮頸癌を原発巣とする各患者 1 例ずつで、組織診断はいずれも扁平上皮癌であった。臨床症状からは瘰癧との鑑別が困難であったが、骨シンチグラフィおよびガリウムシンチグラフィによって末節骨および他の転移巣に異常集積を認めた。

末節骨転移は多発性転移のうちの一転移巣であり、予後不良を示す徴候とされている。末節骨転移が肺癌の初発症状として出現することも報告されており、末節骨転移が疑われた場合、全身の転移巣把握、原発巣把握に骨シンチグラフィ、ガリウムシンチグラフィを施行することが有用と思われる。

20. 腹部手術創に著明な石灰沈着をきたした症例

平田 貴 宮川 国久 奥畑 好孝
国安 芳夫 永井 純 安河内 浩
(帝京大・放)

骨シンチグラフィにおける手術創への集積は教科書的には頻度が高いといわれているが、実際は意外に少ないと思われる。今回われわれが検討した 1 年間の骨シンチグラフィ 315 例では 2 例に認めるにすぎなかった。

集積を認めた 2 例のうち 1 例は下咽頭癌再発で食道再建のため胃管つり上げを行った症例で、腹部手術創の石灰化が腹部単純写真で認められるほど著明であり、また骨シンチグラフィにおける手術創への集積が石灰化の形とほぼ一致ししかも集積が著明であることから特異な症例と思われ報告した。

骨シンチグラフィにおける手術創への集積の頻度の統計学的検討が必要と思われた。

21. 血小板シンチグラフィにより描出された extracranial infarction の 2 症例

石井 勝己 中沢 圭治 高松 俊道
小松 継雄 依田 一重 松林 隆
(北里大・放)

広瀬 隆一 神田 直 (同・内)

^{111}In -oxin を用いて血小板に RI を標識することが可能となって以来、心腔内や血管内の血栓を画像としてとらえることのできる血小板シンチグラフィについて種々の報告がある。今回、われわれも頸動脈部の血栓を血小板シンチグラフィにより描出できたので報告した。

症例は脳梗塞発作後 12 日目と 25 日目に血小板シンチグラフィを行った 2 例で、これらの頸部に RI の異常集積をみとめ頸動脈部の血栓が推測された。これらのうち 1 例は検査翌日に反対側の発作を起こし意識障害を認めたためアンギオを行うことはできなかったが他の 1 例はアンギオにより内頸動脈閉塞が確められた。本法は脳梗塞患者で頸動脈部の血栓も疑われる場合に有用な検査法である。